



第14号  
発行日  
令和3年9月21日(火)  
発行人  
八王子実践中学校  
中学部長 石川敦史

# 東京パラリンピックを体験して 赤塚拳斗先生

シッティングバレーの審判員として令和3年8月23日から9月5日までの2週間を幕張メッセで過ごしました。その体験についてインタビューをしましたので、報告します。

○パラリンピック、「シッティングバレー」の審判員にはどうすればなれますか。

日本パラバレー協会（JPVA）主催の研修会及び、審査講習会に参加し、研修を積まなければなりません。

私の場合は、日本バレー協会（JVA）の審判員なので、パラバレーでもラインジャッジ（線審）ができる資格はありました。この審判講習会には5年間で10回参加しました。

○パラスポーツの選手たちとの交流はありましたか。

せっかく参加をしたので、積極的に話しかけたかったのですが、新型コロナウイルスの影響で、選手と役員の動線が異なっており試合以外での関わりはありませんでした。（試合中はお互いに集中しているのでもちろん話すことはないです。）

○大変だったことは何ですか。

今回一番大変だったことは、



「\*バブル方式」だったことです。外出はおろか、コンビニに行くことすらできませんでした。

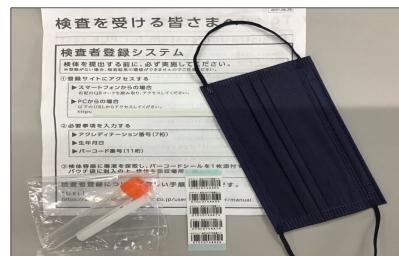
また、私たち役員・スタッフの食事に肉が出ることは

1~2回でした。宗教上の理由で豚肉や牛肉が食べられない方がいらっしゃるからです。タンパク質の摂取は主に「豆」からでした。美味しいのですが、毎食に「豆」が出てきて、私としては豚肉や牛肉が恋しかったです。

加えて、私自身、レフェリーとして「2週間」という長い期間の大会を経験したことなく、手探り状態の毎日でした。ある時には、午後10時に始まり、午前0時に終わる試合の審判をしました。その日の

就寝は午前3時でした。

「\*バブル方式」とは、「開催地を大きな泡で包むように囲い、選手やコーチ・関係者を隔離。外部の人達と接触を遮断する方法」です。入国前のPCR検査、入国後のPCR検査。そして大会期間中は毎日PCR検査を行います。それだけではなく、移動制限・行動制限も厳しく、ホテルと練習会場・試合会場以外には原則移動できないのです。



○この仕事をして、よかったです・うれしかったことは何ですか。

パラリンピックという世界的な大会に国内技術役員（NTO）として参加できたことを誇りに思っています。また、様々な試合を担当して、仲間と協同する

大切さを再確認することができました。

うれしかったことは、この大会期間中の頑張りを評価してもらい、男子決勝戦でラインジャッジをすることができたことです。

←パラバレー審判員  
(赤塚先生はどこに?)



ネットを挟んでRPC選手とイラン選手

○最後に、中学生に語ってあげたいことは何ですか。

まさか自分がレフェリーとしてパラリンピックの舞台に立てるなんて思ってもいませんでした。でも、それができたのです。人生はあるかわかりません。チャンスはきっと誰にでも訪れます。その「チャンスを逃がさない」ために、今、みなさんは頭と体と心を鍛えています。意味のない勉強なんてありません。だから、今できることを全力で頑張りましょう。

ただもっと英語ができていれば国際審判員と楽しく会話ができていたな…とは思っています。



男子決勝戦の担当役員一同